## 轍の迹無し

草とりをしていると、立ち話が聞こえてくる。「きれいなおなすですね」「えー、そのためには三日とおかず消毒せねば…。でも自家用は別に作っているのヨ」―何気なさそうに聞いている団地の奥さん。

同じころ、その地区の農業者グループが北海道視察から帰っての報告の一節―「もう北海道のジャガイモは絶対に食べない。収穫するのを見たが、前日に農薬をびっしり撒き、翌日はすっかり枯れているから、機械でどんどん掘り出すだけ。恐ろしゅうなった」。

こんな農薬公害の話、話にもならぬほど公然の秘密にすぎない。だのに、日本の消費者が野菜類を買うとき、農薬に害されない「安全性」を目安にしているのはたったの二・五～四％にすぎない。ゼロに近い。無農薬、低農薬野菜を店頭で選ぶ余地が全くないから、と食生活情報センターは報じていた。余りにも悲惨な現実である。

日本のノーキョーの国民的急務はこのことへの対応でなければならないはずだのに。

ごく少数の良心的農業者があえぎあえぎ安全生産を守っているのを、いつまで見殺しにするのか。

コメ擁護で活発に発言している作家井上ひさし氏は、「食べ物は生産する場所と消費する場所が近ければ近いほど、安全なものが供給される」と。足下を見よ！　空ぞらしい。

最近、すばらしい農業父子の存在に感動させられた。除草剤はやむをえず使用するが、それ以外は一切使わない低農薬米作。だから二割の減収、八反の耕作で五十俵を収穫。しかも、そのうちから二十俵もアルジェリア難民救済に寄付手続きをすませているのである。運送費約二十万円も分担して。地球の裏側に低農薬の自家製をと、この高き操志の人はまだ二十八歳、隣り村。名は秘して、と固辞。「善行轍迹なし」という語がある。真の善行とは車の通った迹形のようなものは見せないもの、という戒めである。ああ、白面の若者の心境の高さよ！　子の心を深く知る老父また佳し。

（一九九〇年九月十九日）